



# プラテュス

π λ α τ ύ ς

## □ 博士後期課程設置に向けて

大学院保健科学研究院長 小林 清一

昨年4月、北海道大学における第17番目の大学院組織として大学院保健科学院・大学院保健科学研究院が設置されたことにより、保健医療学系の学部組織を有する全国の国立大学法人42大学のすべてが保健医療学系修士課程を有することになりました。当保健科学院も2年目となり早くも修士課程の完成年度を迎えて明年3月には第1期生が課程修了となります。今まで実施した修士課程入学試験では、入学定員に対して常に2倍前後の志願者があり、優秀な人材確保は順調に推移していると確信しています。

昨年の修士課程スタートと同時に、企画戦略室では次なる目標に向けた取組が開始されました。次なる目標とは、当然、大学院組織の最終段階である博士後期課程の設置に他なりません。しかし、昨年設置された北海道大学、東北大学、熊本大学以外の先行39大学のうち、保健医療学系の博士後期課程も設置されているのは23大学に止まっています。修士課程の設置は必ずしも博士後期課程設置を保証するものではないということです。本誌前号にて本年1月末の博士後期課程設置に係る第1回文部科学省ヒアリングまでの経緯を述べましたが、大学院等の設置申請締切が昨年度の6月末から今年度より5月末になり、1ヶ月の前倒しは全てのスケジュールに少なからぬ影響を及ぼしたのは否めません。但し、設置認可も1ヶ月早まることが予想されるため、大学院入試を来年早々に実施できる可能性があり、受験する側も実施する側も年度末の超多忙な時期を回避できるというメリットはあります。いずれにせよ、北海道大学には保健科学院修士課程に引き続き、遅滞なく博士後期課程を設置する使命が課せられています。

北海道における保健医療学系大学院の設置状況では、国公立合わせて6大学に保健医療学系の修士課程が設置されており、入学定員は合計91名です。これに対して博士後期課程の設置は3校のみで、入学定員は僅か10名(看護学系4名、理学・作業療法学系6名)に過ぎません。これでは、北海道における保健医療学系の教育者や研究者の供給は疎か、保健科学の学問的基盤の確立や継続的な発展は到底望むべくもありません。少子高齢化ならびに生活習慣病予防のための健康維持・増進など、わが国及び地方・地域における喫緊の社会的課題を、医学をベースとした保健科学的見地から実務あるいは研究レベルで解決する高度医療専門職者・教育者・研究者数の絶対的不足を少しでも解消しなくてはなりません。しかも、これら保健科学・健康科学上の重要課題を追究するための必要不可欠な領域である、放射線技術科学及び

検査技術科学系の大学院博士後期課程は北海道では皆無です。折衝の過程では、修士課程設置の際と同様に、「存在しないのはニーズがないからではないか」とか、「国家資格を有するコ・メディカルに大学院は必要ないのでは」といった言葉を耳にしました。残念ながら、このような方々の意識には、われわれが育成する人材は未だ「コ・メディカル(医療従事者)」であって、「ヘルスプロフェッショナル(医療専門職)」とはなっていないようです。超高齢化社会となり、将来全く病氣や医療機関とは縁がないと豪語できる人は皆無でしょう。患者さんとして医療を受ける立場になった時、高度な知識と技術を有する医療専門職者は必要ないと言う人はいないはずです。このような高度医療専門職者の養成に携わる教育研究者や医療施設の部門管理者となるべき人材を継続的に育成する保健科学院博士後期課程の設置については、教育施設は元より、学外実習を担当する医療専門職者、医療施設管理者(病院長、理事長)、各職能団体、医療機器メーカーや企業など多くの関係方面から大きな期待が寄せられています。

1月以降、2回の文部科学省ヒアリングと学内審査会を経て、予定通り5月末に保健科学院保健科学専攻博士後期課程の設置計画書を文部科学省に提出しました。7月の設置審査会の意見を踏まえ、9月初旬に補正計画書を提出し、最終審査を待つばかりとなっています。しかし、最後に強調すべきことは、今回の申請における最終目的は、博士後期課程設置自体にあるのではなく、保健科学における創造的研究を推進する研究者とその学問的成果を継承する教育者となるべき人材育成にあります。そのためには、保健科学院・保健科学研究院における教育研究をより活性化し、実りある成果を世界に発信し続けることが重要です。専任教員にはなお一層の努力が求められていることを認識しています。

Luck favors the prepared mind. (Louis Pasteur)



## □ 寄附分野紹介：脳機能画像学分野

機能回復学分野教授 福島 順子

脳機能画像学分野は平成 21 年 4 月より 2 年間の期限で開設された寄附分野です。教員は福島順子教授（機能回復学分野兼任）と宮本 環特任准教授の 2 名です。本分野では脳の機能について臨床例および健常者の脳機能マッピングを行うことによる解明を進めています。主に医歯学総合研究棟の研究用 MRI を利用して様々な課題を用いて機能的磁気共鳴法（fMRI）で脳機能マッピングを行っています。



〔写真 左：宮本特任准教授、右：福島教授〕

### 主な研究内容

#### (1) fMRI を用いた精神疾患の病態研究：

発達障害、精神疾患が脳の機能障害によることは明らかであり、現在様々な分野、方法で病態および病因の解明が進んでいます。この研究は発達障害、精神疾患の脳機能障害の解明のため、顔の表情認知課題を行っている最中の脳活動部位を fMRI で画像化します。そして健常者と臨床例の比較、各疾患の間での比較を行い、脳の機能障害とその部位を解き明かすことを目的としています。

(A) 特定領域研究「病態脳」における広汎性発達障害（PDD）の脳機能画像の研究（代表者 福島順子、分担者 宮本 環）の補助金を受けて行っています。発達障害が脳のどのような機能の障害かは未知の分野です。発達障害の人が苦手とするといわれている人の顔の表情の認知にかかわる脳部位について調べています。

(B) 統合失調症において障害が考えられていますが、成人アスペルガー障害などとの違い等、未解決の部分が多く、これらについて行っています

#### (2) fMRI のリハビリテーションへの応用：

課題が成功したときと失敗したときとを比較すると、成人と子供の間で脳の活動部位に差異があることが知られています。課題の成否の結果について、positive feedback と negative feedback を受けた場合の相違について、健常者と高齢者、脳血管障害などでリハビリを受ける患者において、検討する予定です。この成果は、motivation に影響を与えられ、教育、リハビリテーションなどにおいて、応用されることができると期待されます。

#### (3) 眼球運動に関連する脳部位・機能の脳波を用いた研究：

眼球運動課題を用い、課題関連脳部位の脳波を記録、平均加算し、眼球運動に関連する脳部位がどのような機能（例：動きの判断と記憶、眼球運動をする・しないの決定、運動の準備や遂行な

ど）を有しているか、特にこれらの機能が再現される時間経過と脳電位の対応関係を明らかにし、各脳部位間の空間的・時間的特性を明らかにすることを目的としています。医学研究科認知行動学で、訓練したサルにおいて、これらの機能をコードするニューロンが補足視野に多数存在することがわかっている（Neuron 62:717-732、2009）、ヒトの脳においても補足視野を含む領域が関与していることが推定されます。ヒトにおいて、より複雑な課題でも、眼球運動に関連する領域にその機能が関与するかどうかを調べる予定です。

#### (4) その他：

研究協力として医学研究科リハビリテーション医学分野（脊髄損傷後の運動野機能変化の脳機能画像研究、東京大学大学院工学系研究科知能システム分野と共同のロボット義手開発など）、医学研究科放射線医学分野（精神疾患および神経疾患の拡散 MRI 研究など）と協力関係にあります。今後も他の学内外の大学院などと連携して学際的研究を発展させることを計画しています。

## □ 海外フィールド調査紹介

### パプアニューギニア（その 1）

創成看護学分野准教授 山内 太郎

突然ですが、（誌面の穴埋めとして！？）海外フィールド調査について不定期的に紹介させていただくことになりました。今回は、1993 年より断続的に調査を行っているパプアニューギニア高地社会を取り上げます。最近では隣国のソロモン諸島に調査地が移り、足を踏み入れる機会があまりなく残念なのですが、大学院修士・博士課程の時期を中心に、通算 2 年間以上滞在している第 2 の故郷です。

#### 最後の秘境？楽園？

南太平洋に浮かぶニューギニア島は、世界で 2 番目に大きな島であり、日本から 5 千キロ南下したオーストラリアのすぐ北に位置しています。旧オーストラリア領（それ以前はドイツ領とイギリス領）であった島の東半分と 700 もの島々が 1975 年に独立してパプアニューギニアとなりました。自然環境および文化の多様性から「世界最後の秘境」「地上最後の楽園」と呼ばれ、約 800 もの言語集団が暮らしています。

#### 高地社会では労働は女性に依存

ニューギニア島の中央部には 4000m 級の高峰を連ねる中央山脈が東西に走り、高地部を形成しています。高地社会ではサツマイモ栽培とブタ飼育を中心とする自給自足の農耕が生業です。休耕地をおいた焼畑による輪作を行っています。火入れの後に土を耕し、マウンドと呼ばれる盛り土を作ってサツマイモを栽培します。畑仕事とブタの世話は女性の仕事です。

フリと呼ばれる言語集団（フリ語族）を対象とした 1994 年の調査では、女性は 1 日当たり約 2 時間半（成人 12 名平均値）を畑仕事とブタ飼育に費やしていました。また、男性の労働時間は僅か 1 時間弱（成人 15 名平均値）でした。ニューギニア高地社会 10 集団の先行研究をみると農業労働時間の性差（女性－男性）

は平均 98 分/日 (61-211 分/日) であり、フリの労働時間の性差はニューギニア高地社会では平均的なものといえます。



〔パプアニューギニア高地に暮らすフリの人々―祖先の森にて〕

### サツマイモは万能

ニューギニア高地社会ではサツマイモが主食です。もともとタロイモが主食だったのですが、300～350 年ほど前にサツマイモがもたらされ一気に広まりました。サツマイモは貧弱な土壌や低温に対する耐性があるとともに生産性が高いため、高地社会に人口増加を招いたと考えられています。

人々の普段の食生活は、サツマイモと食用植物 (野菜) のみです。必要なカロリーを摂取するためにはサツマイモを 1 日 2 キロ近く食べなければなりません。焼きいも丸 1 本食べればお腹一杯になりますが、ニューギニア高地人はそれを 1 日 7 本食べるような具合です。「単品栄養学」は健康に悪く、栄養のバランスを取るために他種類の食物を摂ることが栄養学の常識ですが、食生活をサツマイモに大きく依存しているにもかかわらず、筋骨隆々としているニューギニア高地人を思うと、人間の不思議さ、栄養の難しさ・深さを感じます。動物性タンパク質の摂取は非常に限られています。家畜として飼っている鶏やブタを祝祭や儀礼の際に食べますが、希です。ちなみに、人間以外の家畜、鶏やブタの餌もサツマイモです。



〔主食の「万能」サツマイモ (40 種類を数える)〕

### ニューギニア高地人の発見

パプアニューギニアの沿岸部は海上交通がありますが、内陸部は中央の険しい山岳地帯を始め自然環境が厳しいため、陸上交通

は発達していません。高地への交通手段はもっぱら飛行機となります。1920 年代に金鉱が発見されてゴールドラッシュとなり、白人による探検隊がセスナで高地に不時着し、ニューギニア高地人を「発見」しました。現在は高地の飛行場 (と呼べる程立派なものではなく、単なる滑走路) から小型飛行機で 1 時間半も飛ばせば、高層ビルが立ち並び、舗装道路に車が走る都市、首都ポートモレスビーに到着します。

### 近代化・都市化によるライフスタイルと労働の変化

伝統的な生活を色濃く残す高地社会から都市に移住した者は教育も技術も持たず、定職に就くことができる者は非常に限られています。大部分の者は、小売業 (商店) で成功している同郷者の家に居候したり、セツルメントと呼ばれる不法居住区に廃材やトタンを利用してバラックを建てて住んだりしています。お金が無ければ食べていけない都市生活において、移住者はインフォーマルセクターの労働、すなわち、ビールやソフトドリンクの空き瓶を集めて換金したり、卸売り店から冷凍の輸入肉を仕入れて、調理して売ったり、タバコなど嗜好品を仕入れて、1 本 1 本小分け売りしたりして現金収入を得ます。

都市移住者の労働時間は、農村よりもはるかに長時間でした。男性の平均労働時間 (1 日の実働時間) は 272 分、女性は 179 分でした。つまり、農村における 1 時間～1 時間半の労働時間が都市では 3 時間～4 時間半と 3 倍に伸びたのです。また興味深いことに、農村でみられた労働時間の性差 (女性に大きく依存) は都市ではみられず、むしろ男性の労働時間が長い傾向でした。

背景だけで紙面が尽きてしまいました。急速な近代化が健康に及ぼした影響については、稿を改め次の機会に紹介いたします。

## □ 教職員向け心肺蘇生法講習会』報告

病態解析学分野准教授 小野塚 久夫

第 2 号プラテウスでお知らせしましたとおり、「心肺蘇生練習用のマネキンおよび AED トレーナー」が保健科学研究所共有の備品として納品となり、これを受け、

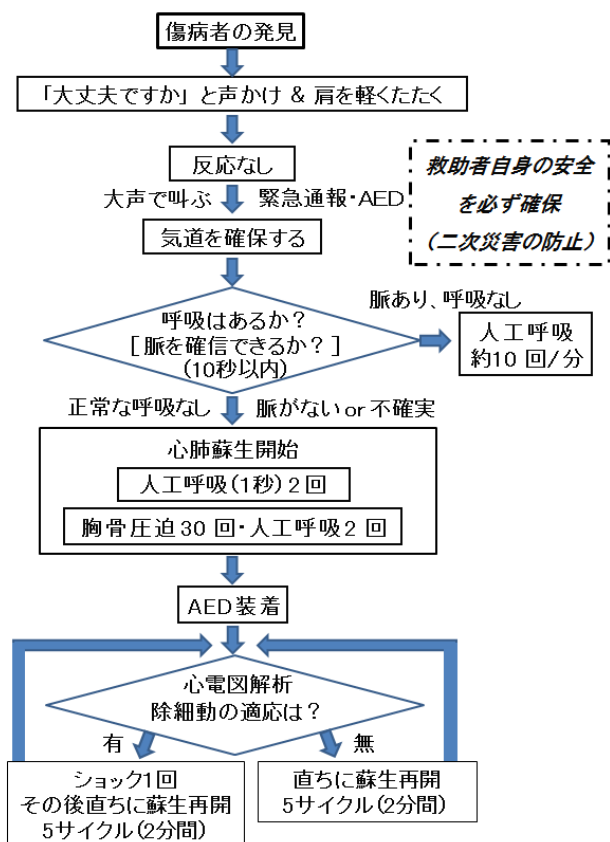


『教職員向け心肺蘇生法講習会』を、3 月 9 日 (月)、10 日 (火)、11 日 (水)、19 日 (木) の 4 日間計 5 回、A 棟 3 階第 4 実習室で開催いたしました。25 名の教職員の方々のご参加をいただき、和気あいあいとした雰囲気の中で講習会を行うことができました。この講習会直後の 3 月 22 日には、タレント松村邦洋氏が、「第 3 回東京マラソン」出場中に心肺停止状態となり、駆け付けた医師と救急救命士による心肺蘇生と自動体外式除細動器 (AED) の使用で救命されたことが報道されました。その後、後遺症なく芸能活動に復帰しているのはご存知のとおりです。市立札幌病院救急部に勤務していた頃の私自身の経験でも、心肺停止状態で搬入された患者さんのうち、後遺症なく社会復帰可能となったケースは、ほとんどが、心筋梗塞や不整脈発作など心疾患が

原因で心停止となった症例であり、松村氏の事例は典型例といえるでしょう。

講習会では、まずDVDを用い、動画で実際の蘇生手順をご覧いただいた後、マネキンを用いて心肺蘇生を行う人、AEDを届けるとともに蘇生に参加する人、の役割を交代で担っていただきました。

推奨される心肺蘇生法の手順は、これまでも何度か変更されていますが、現在の標準的な心肺蘇生法は、AHA（アメリカ心臓協会）が中心となって設立された、国際蘇生連絡協議会 2005 年国際コンセンサスをもとに策定されたガイドラインに依拠しています。まず傷病者の反応を確認し、反応がない場合、成人では突然の心停止の原因が心臓自体の病気によることが多いため、緊急通報と AED の手配を優先します。ついで「頭部後屈あご先挙上法」で気道を確保した上で呼吸状態を観察し、一般市民の場合、脈の触知にこだわらず、正常の呼吸がなければ、すみやかに心肺蘇生を開始することになります。心臓マッサージと人工呼吸の回数は、以前は成人 15:2、小児 5:1 ですが、現在は、成人、小児とも 30:2 が標準となっており、また、心臓マッサージは 1 分間に 100 回とされ、今回の講習会では、そのリズムに合致する中島みゆきの「地上の星」を BGM としました。十分な心肺蘇生を継続するには、蘇生を行う側の体力も必要であり、現在は 5 サイクル（約 2 分間）を目安に、胸部圧迫の交代を行うことも重要とされ



ています。2005年のガイドラインによる現在の心肺蘇生の手順を図に示します。

今後も随時講習会を開催したいと思いますので、気軽に参加し

ていただければ幸いです。

最後に、講習会の際に、質問いただきました件について確認いたしましたので、記載いたします。

AEDの水濡れ患者への使用について：水は電気を伝導するため、水中での使用は不可。胸部が濡れている場合は、水分をふきとり、パッドが濡れている部分に接触しないようにする。濡れた床の上などに患者が横たわっていても、胸部が濡れていなければ AED 使用は構わない。

乳児の心肺蘇生：日常的に蘇生を行うものが脈を確認する場合、成人のような頸動脈ではなく上腕動脈で行う。これは、乳児では頸部、鼠径部とも肉付きが良く、同部での触知が困難、また頸部では無理に行うと気道を圧迫することも起こりうるため。

## □ MBA 特別コースについて

保健科学院修士課程2年 武藤 浩史

今年度から、保健科学院と小樽商科大学大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻と提携した MBA 特別コースがスタートしました。このコースは、経営感覚に優れた高度医療専門職を養成することを目的としています。現在、私はこのコースの一期生として、小樽ビジネススクール (OBS) で経営学について学んでおり、並行して保健科学院ではフィルムレス運用の経済効果に関する研究をしています。このような環境に身を置いて学べることは大変幸運であると感じており、充実した毎日を送っています。スタートしてまだ3ヶ月あまりですが、MBA 特別コースを志望した理由、保健科学院と OBS、今後の進路について、以下に私の意見・感想を述べたいと思います。

### 1. MBA 特別コースを志望した理由

私は放射線技術科学専攻出身です。学部時代に、診療放射線技師として働く上で今後は通常の業務+αの強みが求められていくと教わりました。また、病院実習に参加して専門分野に秀でた多くの技師の方々と接し、最近の医療情勢を学ぶうちに、自分でもその強みを獲得する必要性を感じました。この強みには様々なことが考えられます。すでに就職した同期の中には、MRI や CT 検査などにおけるスペシャリストを目指し勉強している人もいます。そこで、自分が持つことのできる強みは何だろうかと考えたとき、卒業研究や実習を通して学び、興味を持った医療経営が頭に浮かびました。そして、医療情報や医療経営についての知識を深めたいと思い、保健科学院に進学しました。

そんな中、昨年の夏に指導教員からこのコースを紹介していただきました。医療に関する知識を持ち、学生でありながら社会人の中で自分を磨き、実践的な経営学を学ぶことは、自分にとっての強みとなるのではないかと感じ、MBA 特別コースへの進学を決意しました。

### 2. 保健科学院と OBS

現在私は、保健科学院で研究、クリニックで診療放射線技師としてアルバイトを行いながら、OBS で授業を受けています。

保健科学院では学部時代に行っていた、放射線部におけるフィ

ルムレス運用の経済効果に関する研究を引き続き進めています。今までに、フィルムレス運用による医療従事者の主観的な便益の定量化や撮影検査のコスト計算を行ってきました。今後は OBS で学ぶ知識を活かし、それらの結果を具体的にどのように病院経営に活かすことができるのか、明確に示すことができるようになりたいと考えております。

OBS では非常に多くの課題が出ると聞いていたため、前倒して研究を進めてきましたが、それでも課題に追われ、余裕がない毎日を送っています。課題はケースを読んでそれを分析してまとめる形式が多く、自分の考えをわかりやすく簡潔な文章にまとめることがいかに大変かを痛感しています。

また、OBS には実に様々な立場の方々（公務員、銀行関係者、医療関係者、小樽商科大学の卒業生など）が在籍しており、21 歳から 74 歳と非常に幅広い年齢層です。このような社会人として現場の経験を積んできた方々と勉強しディスカッションをしていると、当たり前かもしれませんが自分の知識・経験不足を実感させられます。また、日中は仕事で課題をこなす時間がないにも関わらず、しっかりと仕上げている姿を見ると、私も負けずに頑張っていこうという気持ちになります。向上心の高い方々に刺激を与えられながら、日々勉強に励んでいます。

### 3. 今後の進路

今後は、まず前期で経営学の基礎をしっかり身につけ、後期は大学院の研究を仕上げることに力を注ぎたいと思います。OBS 卒業後は、診療放射線技師としての道を歩むか、病院の総合職としての道を歩むか、現在非常に悩んでいるところです。まだ決めかねていますが、どちらにせよ、この MBA コースで培った医療と経営の知識・経験を自分の強みとし、それを活かして病院・患者さんのために医療に携わっていきたくと考えています。

## □ 高麗大学保健科学大学の表敬訪問について

放射線技術科学専攻主任 酒井 正春

6月27日(土) 韓国 高麗大学保健科学大学の林國煥学長を団長とする一行18名が来訪されました。

高麗大学校は韓国で最も大きな(20カレッジ)私立大学で、100年以上の歴史を持ち、李明博現大統領をはじめ多くの人材を輩出している有名校です。

当日は小林研究院長、松岡事務室長、放射線、理学療法、作業療法の教員9名、韓国からの留学生のキムさんなどがお迎えしました。歓迎式典では、小林研究院長の流暢な(?)韓国語での歓迎のことは始まり、両校の教員紹介、高麗大学保健科学大学の紹介などが行われました。その後、放射線実習施設、リハビリテーション実習施設などを見学していただき和やかに親交を深めることができました。高麗大学校はその理念に「Frontier Spirit」を掲げる総合大学で、保健科学大学は数年前に4年制となるなど、私たちと共通の側面を持っています。国際交流が重要なテーマとなっている昨今、保健学科、保健科学研究院の国際化

の一環として今後も交流を進めることが望まれます。



〔高麗大学保健科学大学学長(左)と小林研究院長〕



〔高麗大学保健科学大学一行と保健科学院教員〕

## □ オープンキャンパス実施報告

アドミッション実施委員会委員長 山本 徹

8月2日(日)、3日(月)に北海道大学オープンキャンパスが開催され、小雨模様の日もあり天候には恵まれませんでしたが、医学部保健学科の参加者は2日間合計874名で、少子化にも関わらず昨年よりも151名増加し大盛況でした。参加者からは「将来、どんなふう社会に出て貢献していけるのか、より鮮明にイメージすることができ、是非、北大に受かって勉強したいと思いました」などの声が聞かれ、各専門職および保健学科の魅力が十分に伝えることができたものと思います。今年の保健学科新入生の約1/3がオープンキャンパス参加経験者でした。来年も各専攻で学ぶ強い意欲を持った優秀な学生の入学が多数期待できそうです。



〔オープンキャンパス説明会 於：医学部臨床大講堂〕

## □ 平成21年度FDワークショップについて

生活機能学専攻主任 八田 達夫

日時：平成21年9月9日(木) 9:00～17:05

場所：人文・社会科学総合教育研究棟 (W棟)

学科FDのテーマは「保健学科の教育と現代学生気質」でした。昨年の「学生のメンタルヘルス」に引き続き、実習等をめぐる学生の諸問題について取り上げました。保健管理センター・学生相談室の渡邊 誠先生には、我々の感じる違和感を解説していただき大きなショックも受けました。引き続きグループ討論は大変熱心に行われ、プロダクツ発表は示唆に富むものばかりでした。北大FD伝統のグループ討論の大切さをあらためて感じました。昨年からの継続企画「わたしの授業」では、石津明洋先生と山内太郎先生から熱意ほとばしる授業紹介がありました。学院FDは「大学院の未来と国際化・多様化」がテーマでした。学術国際部国際企画課国際教育連携支援チーム佐羽内喜久子氏、マケナ理加氏による「教育の国際化」はインパクトのある内容で、国際化に関する原理的な問いを呼び起こされたように感じました。留学生センター高橋 彩先生による「教育の国際化における留学生支援の問題」では、北大の現状と受け入れに関する基礎をていねいに教えていただきました。最後は伊達広行先生による「本学院修士学生へのアンケート結果と未来について」で、安心したり反省したりでした。昨年から大学設置基準により義務化されたFDでしたが、研究院の皆様のご協力で無事終わることができました。委員一同感謝申し上げます。



[FD ワークショップ 渡邊 誠先生の講演]

## □ 図書室便り

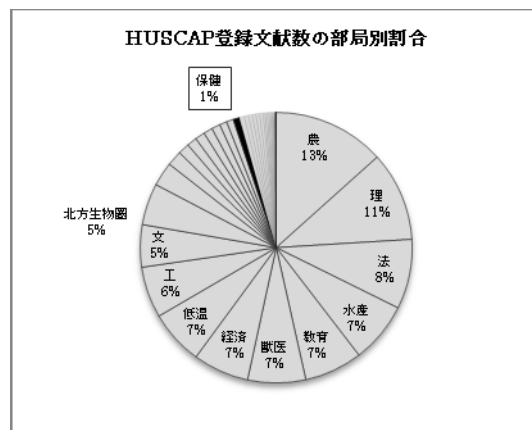
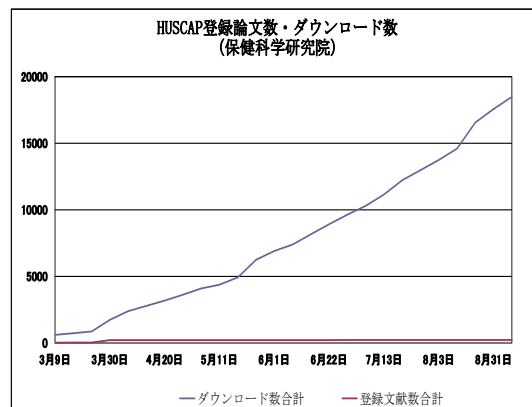
図書室 小林 泰名

保健科学図書室と附属図書館は現在、保健科学研究院所属の研究者の方々の著作論文等を電子化し、北海道大学学術成果コレクション(HUSCAP)で公開する作業を進めています。

論文登録開始から7カ月たち、論文のダウンロード数は順調に伸びて、9月7日までに約18,500回もダウンロードされています。

現在の保健科学研究院の登録文献数は230件です。これからも新たな論文を随時収録していきますので、ご協力お願いいたします。

HUSCAPについてのお問い合わせは [hs@lib.hokudai.ac.jp](mailto:hs@lib.hokudai.ac.jp) まで。



## □ 人事異動

平成21年3月31日付け

(定年退職)

森下 節子 基盤看護学分野教授  
三浦 基一郎 医学系事務部総務課課長補佐

(辞職)

濱田 珠美 基盤看護学分野助教  
(旭川医科大学医学部看護学講座准教授)

高橋 順子 基盤看護学分野助教

林 佳子 創成看護学分野助教

岩崎 沙理 病態解析学分野助教

朝日 まどか 生活機能学分野助教

平成21年4月1日付け

(採用)

赤間 明子 創成看護学分野講師

荒木 奈緒 創成看護学分野助教

宮本 環 脳機能画像学分野特任准教授  
(寄附分野)

常田 美和 社会人学び直しニーズ対応  
教育推進事業博士研究員

(昇任)

青柳 道子 基盤看護学分野講師

(基盤看護学分野助教)

(転出)

向井地 博之 工学系事務部総務課長  
 (医学系事務部総務課課長補佐)  
 杉山 淳一 独立行政法人日本学生支援機構  
 北海道支部副支部長  
 (医学系事務部総務課係長 (庶務担当))

平成21年5月7日付け

(採用)  
 尾崎 慕子 事務室事務補助員 (庶務担当)

平成21年5月31日付け

(辞職)  
 藤田 磨美 事務室事務補助員 (庶務担当)

(転入)

松岡 典子 医学系事務部総務課課長補佐  
 (教育学事務部係長 (庶務担当))  
 堀田 文雄 医学系事務部総務課係長 (庶務担当)  
 (施設部施設企画課係長 (施設企画担当))  
 樽見 和憲 医学系事務部総務課係長 (教務担当)  
 (学務部教務課係長 (生涯学習担当))

平成21年7月1日付け

(転出)  
 水野 嘉永 施設部施設企画課主任 (施設契約担当)  
 (医学系事務部総務課主任(庶務担当))

## □ 平成21年度科学研究費補助金交付及び各研究費、受賞一覧

種目	氏名	題名
新学術領域	福島 順子	青年期自閉症障害の表情認知における脳機能画像
特定領域	福島 順子	広汎性発達障害の視線解析と機能画像による病態の研究
基盤研究B	伊達 広行	医療用放射線トラック解析へ向けた生体内分子の電子衝突断面積の決定
基盤研究B	西岡 健	放射線照射を生き延びた癌細胞に秘められた謎：癌根絶への多角的アプローチ
基盤研究B	齋藤 健	高次神経活動の制御に係わる必須微量金属動態の解明
基盤研究C	三神 大世	拍動時の歪み計測に基づく頸動脈プラーク性状の非侵襲的評価とその臨床的意義
基盤研究C	境 信哉	脊髄性筋萎縮症（I型）児に対する系統的なスイッチ活動を用いた自発的活動の遠隔支援
基盤研究C	久保 直樹	PETにおける非観血入力関数測定システムの開発と定量性向上について
基盤研究C	福島 順子	高齢者の姿勢調節とその学習効果－視線移動と視覚刺激の影響－
基盤研究C	山内 太郎	開発と急速な経済発展の渦中にある途上国都市部における子どもの身体と環境適応能
基盤研究C	石津 明洋	血管炎発症機序の解明と新しい分子標的治療法および病態診断法の開発
基盤研究C	傳田 健三	児童・青年期の気分障害、注意欠陥多動性障害および広汎性発達障害に関する疫学的研究
基盤研究C	加藤千恵次	ルビジウム82心筋PETによる虚血性心疾患の早期診断法の開発
基盤研究C	河原田まり子	労働者を対象としたストレスマネジメントプログラムの効果に関する無作為化介入研究
基盤研究C	浅賀 忠義	姿勢制御における筋シナジーと運動学習に関する研究
基盤研究C	山口 博之	肺炎クラミジアの感染細胞内での生存・増殖様式を決定づける宿主応答と分子基盤の解明
基盤研究C	吉田 繁	皮膚癌の免疫監視回避機構の解析と臨床検査への応用
基盤研究C	矢野 理香	脳血管障害患者を対象とした手浴ケアモデルの検証
基盤研究C	良村 貞子	医師の事前指示に基づく看護職者の薬剤管理における裁量と法的責任
基盤研究C	鷲見 尚己	がん患者の在宅療養に向けた看護者間のネットワークシステムの構築

基盤研究 C	上田 泉	事例分析による乳幼児の虐待事例・虐待リスク事例における父親の特性と心理社会的要因
基盤研究 C	佐伯 和子	保健師学生が政策に関する基礎的能力を獲得するための効果的な教育カリキュラムの開発
基盤研究 C	山本 徹	賦活領域の微細構造解析
挑戦萌芽	宮島 直子	高齢者の精神機能を高める看護コミュニケーション・スキルの開発
若手研究 B	岩崎 沙理	ヒト末梢血に検出される CD8 陽性単球に関する研究
若手研究 B	堤 香織	放射線治療後にみられる再増殖腫瘍細胞の運動特性の解析
若手研究 B	渡辺 玲奈	急性期病棟でのチームナーシングにおける小規模看護チーム単位と看護拠点の再構築
若手研究 B	斎藤 展士	運動学習に影響を及ぼす姿勢制御の学習メカニズムの解明
若手研究 B	笠原 敏史	随意的連続運動課題時の運動制御と筋の特性についての研究
若手研究 B	寺下 貴美	ドクターヘリにおける費用効果分析と導入予定地域における費用効果シミュレーション
若手研究 B	高山 望	脳卒中による右大脳半球損傷患者におけるコミュニケーションの課題と看護介入の検討
スタートアップ	平野美千代	前期高齢女性への効果的な介護予防ケア-社会的活動と生活意欲に着目して-
厚労科学研究費	小笠原克彦	疾患を中心とした医療連携フローの可視化と医療資源の配置に関する研究
研究助成	コリー紀代	Comparison of Decision-making Trees in Delegating Nursing
研究助成	山口 博之	リボソーム DDS を用いた細胞内寄生性細菌の制御システムの開発
共同研究	千葉 仁志	食品素材による LDL/HDL コレステロールバランスの改善
シーズ発掘試験	山本 徹	MR アーチファクトフリーのインプラント材設計手法の確立
シーズ発掘試験	吉田 繁	皮膚・粘膜上皮でのがんや感染症の予後診断法の開発
教育推進事業委託	良村 貞子	潜在助産師のための再チャレンジ支援プログラム
社会還元普及事業	山口 博之	ようこそ不思議な細菌の世界へ！-身の周りの細菌を覗てふやして感じてみよう-
受託研究	八田 達夫	理想的いすの開発
受託研究	八田 達夫	グランドフリッチャー、汎用車いす MYU4 のアクティブバランスシートンク (ABS) 仕様の開発と評価
日本ケア学会賞	山内 太郎	Modernization nutritional adaptability and health in Papua New Guinean Highlanders and Solomon Islanders



### 広報室(編集委員)

伊達広行(広報室長)、小野塚久夫、高橋光彦、  
竹内文也、山内太郎

発行 北海道大学大学院保健科学研究院・広報室  
〒060-0812 札幌市北区北 12 条西 5 丁目

連絡先 庶務担当

電話 011-706-3315

E-mail [web@hs.hokudai.ac.jp](mailto:web@hs.hokudai.ac.jp)

URL <http://www.hs.hokudai.ac.jp>